

科目区分：教科及び教科の指導法に関する科目(中学校)

授業科目名：管楽器(1)

対象年次：1年次～(17名受講)

## 管楽器(1)

音楽教育講座・竹内 彬

### 1. 授業の目的と到達目標

中一種免(音楽)、高一種免(音楽)の取得における器楽領域に分類される本授業の目的は、以下の3つからなる。

- ① 音楽科教育において使用されるリコーダーや、吹奏楽等の部活動で使用される管楽器一般の基礎知識をつけ、演奏技術を身につける。
- ② 自己の演奏技術の習得を通して、実践的な管楽器指導法を身につける。
- ③ 独奏や重奏の演奏を通して、音楽表現や理解を深める。

これらの目的に合わせて到達目標を以下の4つを設定した。

- ① 管楽器の扱い方や管理方法、歴史、レパートリー、合奏における役割等の基礎知識を説明することができる。
- ② 管楽器の演奏技術を習得・向上し、楽書や教科書の教材を演奏することができる。
- ③ 自己の継続的な演奏技術の学習を通して、効果的な練習方法、身体の使い方、正しい奏法等、他者に対しても実践的な管楽器指導法を示すことができる。
- ④ 自己や他人の指導法や演奏について、適切に評価し助言できる。

### 2. 授業の概要

授業の内容は大きく3つに分かれる。

- ① 個人レッスン:一人ひとりの習熟度に合わせて課題を設定し、学期末の発表会を目標に演奏技術の習得・向上、音楽表現の探求を目指す。
- ② 模擬レッスン:個人レッスン形式で他の履修生を指導し、実践的な管楽器指導法を考える
- ③ 選択した管楽器の基礎知識に関するレポートを作成する。

### 3. 受講生の状況と授業実践の取り組み

本学期の受講生は全17名(1年次6名、2年次5名、3年次5名、4年次1名)であった。楽器の選択は個人の自由に行っているが、個々の

習熟度には大きな差があり、特に個人レッスンでは学習者にあった指導内容を検討する必要があった。

#### ① 個人レッスン

毎回のレッスンでは振り返りシートに記入し、次のレッスンまでの課題を明確にさせた。習熟度別に以下のように指導内容を工夫した。

- ・卒業研究を見据えている学生に対しては、基礎的な奏法を改善するにあたり、身体の動きと実際の演奏を観察させ、自分自身で言語化できるように指導した。また課題曲としては選択楽器のスタンダードなレパートリーを与えた。
- ・部活動等で過去に演奏経験のある学生に対しては、自分の楽器のオリジナル作品にこだわらず、クラシック音楽の名曲や未学習の作曲家の作品を取り組ませた。  
例)サクソフォンの学生にバッハやシューマン、オーボエの学生にブラームス
- ・全くの初心者に対しては、授業者の専門であるクラリネットを取り組ませ、管楽器の演奏に必要な呼吸やアンブシュアなど、基礎的な身体の技術を習得させた。  
学期末の発表会では作品を完成させ、人前で演奏表現する上での心身の向き合い方を考えさせた。異なるレベルの履修生がいるが、各々がよい演奏を目指す姿勢はお互いの刺激となった。

#### ② 模擬レッスン

個人レッスンやこれまでの音楽学習を活かし、履修生は他の学生に模擬レッスンを実施した。レッスンにおいては、楽曲の事前学習も必要だが、目の前で演奏に対し即座に評価し、改善点を提案しなければならない。授業者は、履修生の実施した指導に対して助言し、実践的な指導法を考えさせた。特に、どんなレベルの演奏であってもまずは良い所を見つけること、音楽の3要素や音色・強弱などの項目に対してバランスよく指導すること、生徒役に寄り添い一方的な押し付けにならないことなどの助言をした。

### ③ レポート課題

初心者の中학생に向けて、自分の選択楽器の「楽器の扱い仕方」「聴いてほしい楽曲」をまとめさせた。

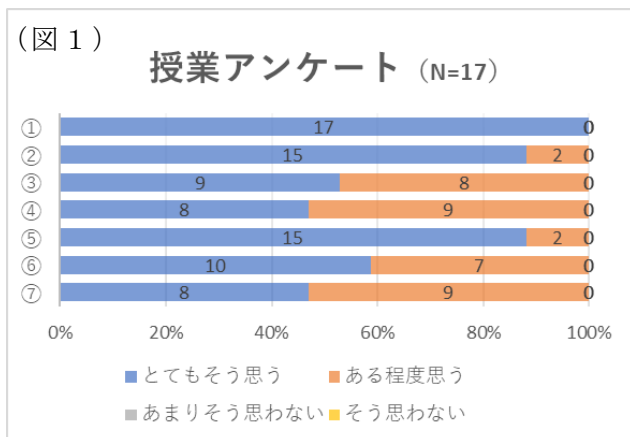
### 4. 授業アンケートと今後の課題

全ての授業の終了後、以下の項目についてアンケートを実施し、(図1)の結果を得られた。

- ① 指導内容・フィードバック・助言は明確で理解しやすかったか。
- ② 授業の課題・進度は適切だったか。
- ③ 自己課題を明確にもち、準備を十分に行い、毎週の授業に参加することができたか。

#### 【到達目標との関連項目】

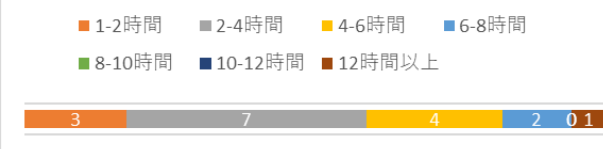
- ④ 自分の選択した楽器の扱い方や管理方法、歴史、レパートリー、合奏における役割などの基礎知識を身に付けたか。
- ⑤ 履修開始時期と比べて、楽器の演奏技術を習得・向上させることができ、楽曲を豊かに表現できるようになったか。
- ⑥ 効果的な練習方法、身体の使い方、正しい奏法等、他者に対しても実践的な楽器指導を学べましたか。
- ⑦ 音楽を理解する力を向上させ、自己や他人の演奏や指導法について、適切に評価できるようになったか。



全ての項目で「とてもそう思う」「ある程度思う」の結果が得られ、授業目標は概ね達成され、履修生の満足度も高かったといえる。一方、③の質問からは履修生によって授業への取り組みの差が見られる。これは、履修生の習熟度や目的意識の差によるものと考えられるが、(図2)に示す通り、1週間の授業時間外の学習時間(練習時間)にも差が見られる。楽器技術の習得には日々の鍛錬が必須であり、時間数と共に質の高い練習方法を提示することで、③の「そう思

う」の割合もより高いものになると考えられる。また、振り返りシートを活用し、授業の初めに1週間の間でどのように練習を取り組んだかなど、履修生と練習の振り返りの共有も行うようにすることで、学生の躓きなどにも授業者が気づき、的確な提案も行っていけるであろう。

(図2) 1週間の授業時間外の学習時間(練習時間) (N=17)



また、到達目標との関連した④~⑦の質問に対しては、「ある程度そう思う」の割合が高く、授業目標の周知あるいは日々の授業の内容が到達目標とどのように関連しているかの意識づけもより行う必要である。特に、自分自身が楽器を上達することも重要であるが、将来的には教育者・指導者になる履修生が多いため、他者へどのように伝えるかという視点を常に持つような指導内容を検討していきたい。同時に、実現可能なカリキュラム作り・科目設定の再検討も必要である。

### 5. まとめ

履修生の習熟度には差があると同時に得手不得手もある。そういった状況の中で、「もっと楽器を上手に演奏できるようになりたい、こう表現したい」という根源的なモチベーションをいかに上げるかが、まずは重要になってくる。もちろん、履修当初はそのように意気込んでも、実際に楽器や作品に向き合う中で行き詰まることも多々あるだろう。それは楽器を演奏する上ではプロ・アマ問わず誰しも経験することである。しかし、その中で履修生に寄り添い、よりよい方向へ導くことが授業者には必要である。また、履修生自身が気付かぬ小さな変化や成長に、授業者が目を向け、能力を伸ばしていくことも重要であろう。さまざまな楽器に対する授業者の指導力の向上も必須だが、学習者の意欲に関する指導方法の研究もこれからの課題である。